の末孫なり。此の君、秋田を掌の中に納め給い、秋田の大将として土崎の湊に居住あるこそめでたけれ。御子一人おわします、御名を源九郎殿とぞ申し奉る、御年二歳になり給い父母の寵愛限りなし。御舎弟城之助愛季殿と申しける、男鹿の庄五百町給わりて男鹿脇本の城におわします。

御家に伝うる郎等には、後藤兵部之丞忠晴・大井将監重元・大久保蔵人之助秀長・後藤采女行久とて何れも忠孝第一の侍なり。上に思いあって民を撫で日夜の出仕隙もなし、此の人々天晴忠なる侍なり。

そのほか、外様の者共までいつきかしずきし奉り、さてまた、泉高清水の城には八柳長門守定頼、新庄には石見守宗頼、五十目采女守定泰、馬場目玄蕃亮泰時、浦城には三浦兵庫守盛永、檜山には大高相模守康澄、そのほか、所々に郡代・城代、国の政道怠りなく家富み栄え給いし、めでたけれ。

実季公　御逝去の事

これはさておき、ここにまた、定めなきは浮世なり、八苦の世の習い、生者必滅、会者定離、電光朝露、誰かまぬがれん、一旦の栄華夢の如し。

また人の命は不定とはいいながら悲しいかなや、太郎殿、風の心地と宣いしが、今を限りに見え給う。御舎弟愛季殿を初め御一門皆々御出、典薬術を尽くし御看病なし参らせ給えども、其の甲

斐更になかりけり。

その時、太郎殿御前に後藤兵部・大井将監・大久保蔵人之助を召され、いかにかたがた聞き給え、人間は既に五十年誰か百年の齢経る事なし、我、此の度の違例にて今生無為の絆を去り、冥途の旅に赴くなり、然れば此処、源九郎に渡すべけれども、いまだ若年なれば愛季成敗致すべし、九郎成人して二十歳になるならば湊を渡し給うべし、一門の人々にも万事頼み申すなり、と仰せられければ、愛季涙にむせび御返答にも及ばず畏みてぞおわします。

誠に光陰矢の如し、長生不老の故事、皆偽りとなり、死病の治する薬なし。悲しいかな、御歳四十六にして天文十六年六月二十二日、ついに空しくならせ給う。人々闇夜のともし火消えたるが如くにて、皆々、袖をしぼりけり、されども光陰留まらざる習い叢蘭の君も息やめば野外に送る習いなり、泣く泣く御死骸をついに煙となし奉る。それより、あまたの高僧・貴僧供養を成され、よきに御菩提御弔い興行成されける。

かくて四人の老中は源九郎殿を守り、いたわり奉る。土崎の湊にありけるが、もはや三七日も過ぎければ定めて城之助殿、此所に御移り成さるべしとて、やがて寺内高清水の城へ若君移し奉り、相添い給う人々には、後藤兵部丞忠泰・大久保蔵人之助秀長・大井将監重元・後藤采女行久、御後見には湊帯刀殿、そのほか近習の侍、外様の人々まで寺内の屋形へ出仕して、よきに奉公仕り月日